

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
分担研究報告書

家族・遺族の精神心理的負担のリスク要因の同定とスクリーニング方法  
の確立に関する研究

研究分担者 宮下 光令 東北大学大学院医学系研究科

研究要旨

既存の多施設遺族調査データ (n=17, 237) で遺族のうつ・複雑性悲嘆の予測モデルを作成した。うつの予測モデルは、AUC=0.74、感度82%、特異度51%、陽性的中率23%、陰性的中率94%、複雑性悲嘆の予測モデルはAUC=0.77、感度82%、特異度59%、陽性的中率21%、陰性的中率96%だった。

A. 研究目的

がん患者の家族にとって死別はうつ病や自殺の重要なリスクでもある。本邦では、がん遺族の15%が死別後にうつや複雑性悲嘆のリスクを有する。援助が必要な遺族に適時介入するためにリスクを予測・スクリーニングする必要がある。本研究は臨床で簡便にがん患者遺族のうつ・悲嘆を予測するためのモデルを開発することを目的とした。

B. 研究方法

過去の大規模遺族データを二次解析した。家族・遺族の抑うつ (PHQ-9で評価) と複雑性悲嘆 (Brief Grief Questionnaireで評価) のハイリスク群の同定を目的に、人口統計学的要因等を統合的に解析し、精神心理的負担を経験する家族・遺族の簡便なリスク要因 (例: 患者との続柄、性別、年代等) を同定した。それらについて、多変量ロジスティック回帰分析に基づき、スコアリングモデルを作成した。

C. 研究結果

がん患者対象の多施設遺族調査であるJ-HOPE3研究 (9, 111名) とJ-HOPE4研究 (8, 126名)、計17, 237名のデータを解析対象とした。人口統計学的要因に、介護中の家族の心身の健康状態、死別に対する心の準備状況、精神疾患

罹患歴の変数を追加した、うつの予測モデルは、AUC=0.74、感度82%、特異度51%、陽性的中率23%、陰性的中率94%、複雑性悲嘆の予測モデルはAUC=0.77、感度82%、特異度59%、陽性的中率21%、陰性的中率96%だった。

E. 結論

本研究で開発したモデルで、死別後のうつ・複雑性悲嘆の予測可能性が示唆された。今後、臨床での実装のために、縦断的なデータを用いて、さらに精度を検証していく必要がある。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Aoyama M, Miyashita M, Masukawa K, Morita T, Kizawa Y, Tsuneto S, Shima Y, Akechi T. Predicting Models of Depression or Complicated Grief Among Bereaved Family Members of Patients with Cancer. *Psychology of Oncology*. 2021. In press

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし